

# 痴人の謀略

※体験版※

「乳首が気持ちよくてたまらねえか？」

これ以上ないほどに敏感になった性感帯を指の腹で上下に激しく摩擦され、ドクンドクンと遠慮のない快感が鬼灯の身体の中に打ち込まれてゆく。

身体の中の部位よりも敏感になってしまっているというのに、男たちの責めは容赦がなく、突起を掴んでグリグリとこね回し、真上から押し付けて指を振動させて感じさせ、鬼灯は何も考えられなくなってしまう。

「んぐううっ！いっ・・・くはっ、あっ・・・あああー・・・！」

二分と経たずに再び胸絶頂に導かれ、鬼灯が汗の珠を飛ばしながら身体を縦にガクガクと揺らす。口の端から淫らな唾液が零れ、鬼灯の細顎を伝ってゆく。

「またイったか？」

「まだまだイかせてやるぜ・・・！」

性感が最高潮に昇った胸の突起は、充血しきって淫らな果実のように硬くどがっている。絶頂から完全に降り切らないうちに再びピンピンと突起を弾かれ、性感神経を爪弾かれるほどの激悦を感じながら、鬼灯の身体が指の動きに合わせてビクン、ビクン、と痙攣する。

「うっ、あっ・・・！ああっ！あっ！あああっ！」

(飛ばれている・・・悔しい、こんな奴らなんか・・・！)

指が引っ込められたかと思うと、今度は突起に男が口を付け、舌や歯を使って責めを仕掛けてくる。

「んぐうううっ！うっ！あああああっ！」

最初に口でイカされたときよりも舌の感覚が鮮烈で、その生温かくぬめる感触に鬼灯は背中を震わせる。舌で固くなった突起をヌルヌルと舐めまわされ、最初とは比べ物にならない甘い官能が鬼灯を突き上げ、快楽に陶醉させようと誘う。

しかし鬼灯はその快楽をギリギリの瀬戸際で耐える。気を抜けば一気に絶頂しそうな愉悅を堪え、奥歯を噛み締めながら上半身すべての愛撫に耐える。耳は相変わらず舐められ続け、ぬぷぬぷと厭らしい音を絶えず聞かされ続け、わき腹はピアノでも弾くように巧みな指さばきで触れられ、腹筋も掌で大胆に撫で回されている。

「んくっ……！うっ……ふあああっ……！」

一人の男が鬼灯の前髪を掴んで無理矢理上を向かせる。  
全身の快楽に耐えてブルブルと震える鬼灯の表情を見て、男たちの熱気がさらに上昇した。

「もうトロ顔じゃねえか！」

「エロいな、こいつ……！男だけど俺勃ちそうだ！」

「くくっ、あの強気な顔がこんなに……」

そう言って一人の男が鬼灯に口づけてくる。



それでもギリギリ耐えていた鬼灯の意識だったが、もう一人の男が放り出されていたもう片方の突起に口を付けた瞬間、鬼灯は非常な焦りを感じた。

(だ、だめだ、片方だけでもこんなに感じるのに、両方は・・・！)

しかし男の口は鬼灯の意思とは裏腹に縦横無尽に動く。立ち上がった突起を舌で捏ね倒し、表面を上下に舐め、音を立てて激しく吸い上げる。

「んふっ、んんっ！ん—————っ！んんん—————っ！」

絶頂に晒されたままの身体をさらに高められ、簡単に両方の胸で絶頂を迎えてしまう。鬼灯の意識が快楽で白み、身体が制御を失って汗を飛ばしながら激しく痙攣する。

しかし男たちの責めは終わらず、鬼灯が絶頂しても鮮烈な愛撫は止まらない。

絶頂したてで靦面に敏感になっている表面を遠慮なく歯で噛み擦り、舌を絡めて、音を立てて激しく吸い上げる。

「んっ！ふあ、ああああっ！あっ！ああ—————！」

鬼灯の艶声が車両に響き渡り、すでに乗客の全てが鬼灯の周りを囲んでいる。

絶世の美青年が激しく胸絶頂する様を存分に眺め、この一角だけ温度が数度も上がり、淫猥な熱気が周囲に立ち込める。

「胸の絶頂って、一回イクと触られ続ける間ずっと続くらしいぜ？」

「マジか？じゃあ五分イカせてみるか」

「よし、お前らどんどん責めろ！」

一瞬でも意識が白むほどの激烈な快感で、鬼灯はすでに虫の息だというのに、男たちは興味本位で鬼灯に絶悦を強いる。

(も、もうだめだっ・・・！)

そう思った瞬間、鬼灯の身体の芯がカアッと熱くなり、快楽の感じ方がさらに高まって体中に伝わり、さらなる愉悦の深みへと滑り落ちてゆく。

「ううっ！うあ、ああああっ！はあ、あああああっ……！」

延々と胸絶頂を続けられ、鬼灯が体中を痙攣させて激しい反応を見せる。

「おもしれー、これもつと続けようぜ」

鬼灯がどれほどの快感にさらされているかも知らず、男たちは無責任にも愛撫を続けた。

「あっ……ああ……あっ……はああ……」

鬼灯の細い顎から唾液が伝い、地面に落下する。

あれから五分はとうに超え、十分近く焦熱の胸絶頂を続けられ、鬼灯の抵抗心は完全に折られた。

つり革から手を離し、手錠にぶら下がる形で吊られ、ガク、と頭を垂れてそのまま静かになり、肩だけが呼吸に合わせて激しく上下している。

「どうだ気持ちよかったら？」

「すげえイキようだったなあ……。胸でイクのってそんなに気持ちいいのかよ？」

すでに愛撫は終わっているのに、鬼灯の身体は未だビクン、ビクンと小さく跳ね、壮絶な快樂絶頂の残滓を味わい続ける。

「おら、ちゃんと顔も撮れよ……」

前髪を掴まれて顔をあげさせられるが、鬼灯の身体はグッタリと弛緩して喘ぐだけで、抵抗をする兆しが一切ない。

晒された美貌は真っ赤に紅潮し、凜とした切れ長の目から涙を幾筋も流して涙を湛え、吊り上がったいた眉もハの字に垂れて、実に官能をそそる表情をしている。

事実、そんな鬼灯のイキきった表情をみて生唾を飲んだ男たちが数人いた。

身体中から汗を流し、床に垂れさせながら、鬼灯の痙攣が続く。強絶なイキ拷問を味わわれ、鬼灯の意識は未だ混迷の中だった。

「エロいなあ、こいつ・・・たまらねえ」

「可愛いなあ、加々知くん」

ここで鬼灯が正常な意識を保っていれば、男たちが自分の名前を知っていること、動画を撮影するという用意周到さの怪しさに気づいたところだろうが、今の鬼灯では耳にどのような言葉も入らない。

「乳首責めは気に入ったか？随分愉しそうだったじゃねえか・・・」

未だ絶頂の熱がさめやらない突起に、ネクタイの先を擦りつけられ、ゾクゾクとした愉悅が発生する。もう身体中が熱くて、全身の性感帯がこれ以上ないほどに目覚めさせられて、触れられていない部分すら激しく疼き始めている。

「おら、起きろ！」

再び頬を打擲され、パン！と乾いた音が響く。薬で感覚を底上げされた肌に、突き刺さるような鋭い痛みを感じて、鬼灯はようやく愉悅の沼から意識を這いださせた。

「くっ……うう……」

しかし理性は戻ったものの、体中を覆う熾烈な欲情は治まらず、気を抜けば再び情欲に流されそうだった。

「こんなのまだまだ序の口だ。もっともっとエロいことをしてやるからな……」

そう言って鬼灯をぐるりと囲んだ男たちが笑う。

「はあ、はあ……一体、私に……何の、恨みが……っ」

身体に渦巻き続ける官能を堪え、鬼灯は幾分か光の戻った瞳で男たちに問いかける。

「恨み？別に恨みはねえよ。でも気持ちいいだろ？もっともっとしてほしくねえか？」

リーダー格らしい男が鬼灯の細顎を取って正面から笑いかける。

「気持ちよくなど、ありませんっ……！」



痛みがないのが、また余計に鬼灯を追い詰め、純粹に快樂だけを注がれる屈辱を感じてしまう。

冷たい薬液が肌の内側に浸透するのを感じ、五を数えないうちに鬼灯の身体は変化を来した。

「んっ・・・ぐっ・・・うああ・・・っ！」

まだ絶頂から降り切っていないかった胸の突起は、まるで燃えるように熱くなり、触れられていないのに、ドクドクと激しい脈動と共に官能が昂ってゆく。

「うあっ！あっ！あああっ・・・！」

声を出さずにはいられない疼きに襲われ、鬼灯は息を乱す。一本でも強力な薬を二本も同じ個所に打たれ、その場所の性感帯は完全に変調してしまった。

「効いてきたか？どうだ、有無を言わせない強力さだろ？」

そう言う男に突起を指先で一回弾かれたが、それだけで鬼灯の全身の性感帯が揺れたかのような衝撃を感じ、身体のコにまで愉悦振動が伝達されてゆく。

「あぁっ・・・あっ・・・あぁ・・・っ」

ブルブルと震え、目を瞑って快楽を耐える鬼灯を見て、男たちが互いに笑い合う。

「ほらほら、さっきの威勢はどうした？」

「もう一回下種って言うてみるよ」

「あぐっ！あぁあっ！あっ！やめ、はぁあぁあっ！あぐっ！あぐっ！あぁあぁあ！」

男たちが入れ替わり立ち代わり、鬼灯の胸の突起を指で弾き、連続して快楽の巨魁をぶつけ続ける。

ひと弾きだけで絶頂に匹敵するほどの快感が巻き起こり、鬼灯はされるがままに喘がされる。

引きちぎれる瞬間まで張りつめられた糸を弾かれるかのように、鬼灯はすでに限界の快楽を迎えそうになり、身体が無意識にガクガクと震えてしまう。

「そろそろ指とか口なんて飽きただろう。ほら、これで気持ちよくしてやるよ」

男たちの手にはうずら卵大の、ピンク色をした道具が握られている。

快感がかすむ目にそれをとらえた鬼灯は、若干意識を取り戻して首を左右に激しく振った。

「い、嫌だ！やめてください！」

「これが何なのか知ってるんだな？これまでも散々使われた経験があるみてえだな・・・」

「嫌がるなよ、もっともっと気持ちよくなるおもちゃだぜ？」

スイッチの入る音がどこから響くと、その物体は蜂の羽音のような音を立てて細かく振動し始める。

「ううっ・・・くっ・・・！」

単純に指で触れられただけで絶頂に等しい快楽を感じてしまうのに、振動責めなどされてしまったら、どれだけの快感が鬼灯を襲うだろうか。両手の拘束は強固で、両足に力は入らず、逃れる手段は絶望的だ。これまで様々な輩に犯され、弄ばれた経験のある鬼灯は、その機械の効果をもつて知っている。そして、はしたないことに鬼灯はその感覚を思い出し、それだけでゾクゾクと身体を震わせていた。

※中略※

イキ癖がついてしまった胸の絶頂は、少し気合を入れて愛撫させられればすぐにでも絶頂してしまうほど、快楽に対して脆弱な器官になってしまっていた。

胸が絶頂すると、その快感は体中にビリビリと伝わり、挿入されているだけのエネマにも響いてくる。それに今は、鬼灯自身を責めている電マの振動も伝わって、息が詰まるほどの激悦が鬼灯を襲い続ける。

「あああああああつ！あつ！も、もう、あああああ！い、イッて・・・！」

「ん？イクかね？ああ、魔羅では行かないだろう？お尻でイクかね？よしよし、手伝ってやろう」

そう言ってもう一人の老人が電マを取り出し、鬼灯の目の前でヴヴヴと振るわせてわざと見せると、やがて攻められ続けている鬼灯自身へと降りた。

しかし、責める部分は自身ではない。

その陰囊と秘孔の間にある会陰を責め始めたのだ。

エネマの底で覆われた部分を、エネマをグリリと回して解放し、強烈な振動を伴う電マを会陰に当て、会陰で絶頂できる鬼灯に何重と重なった激烈な責めを押し付けられる。

会陰絶頂のために刺激される前立腺だが、内からはエネマがしっかりと前立腺を咥えている。外と内から前立腺を責められ、悶絶しない者がいるわけがないのだ。

「あああああああああ！」

鬼灯は口の端から淫らな唾液をこぼしながら、珠の汗を飛ばし、全身を汗で濡らしながら、白い肢体を誘うように痙攣させる。

もう身もだえると言う生易しい状況ではなく、身体が反射的に反応する全身痙攣でしか快楽を現すすべがない。

そしてここにきて、老人たちに射精管理をされている恐ろしさに気づいた。

（ああっ・・・下半身がたまらなくウズウズして・・・極めたい、出したい・・・！）

普段の鬼灯からすれば考えられない望みだが、鬼灯にとっては我慢ならない強烈な焦らし責めだった。これまで散々射精絶頂を強要されて、鬼灯自身が絶頂するのが当たり前になっている。

そんな身体に淫具のな責めは強烈すぎて、根元のベルトがなければすでに射精していただろう。さきほどまで射精したくないなどと考えは微塵に碎かれ、鬼灯は射精絶頂のことしか考えられなくなった。鬼灯が自身の快楽に耐えていると、徹底的に責められている肛悦と会陰の絶頂が同時に訪れ、鳥肌だつほどの激悦が鬼灯を包み込む。

「はああああ・・・あつ！あああああああああ！」

拘束を引きちぎらんばかりに鬼灯の白い肢体が乱舞し、淫らな汗を飛ばしながら狂乱する。

その様に老人たちはカメラを向け、写メするもの、動画を撮る者、好き勝手に自分のしたいことをする。鬼灯がどれだけの快楽の坩堝にはまっているのかも知らずに、打って変わって彼らは余裕だ。

「うぐっ・・・ああ・・・！」

下半身の絶頂に打ち震えながら、鬼灯が蕩けた顔で呻くさまは、遊女など相手にならない、誰もが取り込にまる魔性の妖艶さだった。

「加々知くん、エロいねえ・・・」

「本当に綺麗な子だ。苦勞して探した甲斐があったよ」

「ほらほら、また肛門でイクかな？」

エネマの底へ手を掛けられ、怪しげなスイッチを押される。すると、挿入されているだけで絶頂すると言うのに、振動まで追加されて、鬼灯の感じる快樂は留まるところを知らない。

「ああっ！や、あ、やめえええっ！あああああああああ！」

目を見開きながら涙を飛ばし、鬼灯が懇願する。

しかしヴヴヴと音を立てながら、エネマは洞内を最も気持ちの良い振動で刺激し、前立腺にも、これまでとは比べ物にならないほどの愉悅がドクドクと迫る。

（む、無理だ、こんなの、耐えられ・・・！）

鬼灯の頭が真っ白になり、体中にぶわあ・・・と言葉にできない感覚が広がった直後、身体が硬く硬直して洞内が思いつきり締め付けられる。



鬼灯の白皙の肢体はブルブルと痙攣し、過ぎた快感に肌を震わせている。振動がなくなっても、挿入されたままのエネマが、未だに振動しているかのような感覚に襲われ、鬼灯は何もされていないのに絶頂しそうになってしまう。

「効いたかね？その調子じゃあ、かなりの栄養剤を注入されただろう」

「そろそろ本格的にアナルを責めましょうか・・・まあ、この子はもうとづくに出来上がっているようですが」

ぞっとするような提案をされるが、鬼灯の耳には届いても、脳内には響いてこない。言葉の意味を正確に理解できたならば、鬼灯は全身全霊をもって拒否の姿勢を貫いただろう。

「そろそろ態勢を変えましょうか。おい、君、たのむよ」

そういつて傍らに控えている黒スーツの男に目配せする。そこで他の老人が手で黒スーツの動きを止めた。

「ちょっと待ってくれ、今、魔羅を責めているところなんだ。新しい器具に取り換えるから、それまで待ってくれないかね」

そう言った老人は、手に黒い怪しげな物体を手にしていた。

「それを射精止めしているチンポに使うんですか？」

「こりやあつまりませんな・・・」

老人たちの囁し立てる声に後押しされるように、老人は鬼灯自身を責め続けていた筒を抜き取る。

「んぐううっ！」

抜ける瞬間にも快楽が電気のように走り、鬼灯は腰を浮かせて淫らに感じてしまう。  
老人は筒を放り投げ、巨大な卵のような黒いシリコン体を手に、鬼灯へ近づく。

「ううううっ・・・」

（また、なにか責めを追加されるのかっ・・・！）

卵型と思われた物体は、下半分が卵型で、上半分は、自身に密着するように折り曲げられたグリップだった。

「すでにギン勃ちだからね、取り付けるのが大変だよ……」

そう言うって老人は鬼灯自身へ黒い物体をなんとか装着し、その場から離れる。

鬼灯の裏筋にあたる根元から先端まで強力に密着し、グリップが外れないように強く締め付ける。射精止めをされている鬼灯にとっては、これだけで快感を感じるほどだが、絶頂は根元のベルトで禁止されている。

裏筋に当たる部分には刺激的な粒が並び、締め付けられているだけでゾクゾクと涎が出そうな快感がこみあげてくる。

(うあああつ……極めたい、出したい……！)

これ以上は限界だ、と鬼灯は心を怯ませるが、決して老人たちに快樂を乞う言葉は出さない。

黒いシリコン物体を装着された自身にローションがたっぷり塗されると、老人は物体を掴んでそのまま上下にゆっくりと動き始めた。

ローションの滑りと粒の連なりが裏筋を刺激し、鬼灯に突き刺さるような快感を与え始める。

「あああああ！やめてっ……！あああああ！」

余りの快感に鬼灯の両足が硬直し、腰が無意識にブルブルと痙攣している。これで根元を止められていなければ、とつくに射精絶頂をむかえている段階の快楽だった。

老人は鬼灯自身を黒い物体で好き勝手に引きずり回したあと、ようやく手を離し、鬼灯から離れる。

「うっ……うっ……うう……」

凄悦は感じるのに、絶対に射精できない甘い苦痛に、鬼灯の黒瞳から自然と涙がこぼれる。

身体は射精したくて仕方ないのに、鬼灯の芯の部分はまだ折れず、老人たちに醜態をさらすことだけは頑として拒んでいた。

(も……気持ちいいの嫌です……)

ズクズクと疼く自身に興奮しながら、鬼灯は紅い顔で泣き顔を快樂にゆがめる。その様は被虐の快樂美に満ちていて、見る者すべてを性的に興奮させるほどの魅力があった。

「加々知くん、泣いちゃったねえ……。しかし泣き顔もなんと麗しい……。白い頬が紅く染まって、実にそる表情だよ……」

その場にいる全員が鬼灯の淫靡な魅力の虜となり、もつともつとこの美青年を責めたい衝動に駆られてゆく。

「じゃあ、私も責めてあげようかね……」

鬼灯の上半身に近づき、老人は両手にもった半円のカップを鬼灯の胸の取り付ける。

半円のカップの中には、斜めに取り付けられた透明のシリコン棒がそれぞれ生えていて、ローションを垂らされてさらにテラテラと光り、妖しさを放つ。

老人は鬼灯の胸にカップを取り付け、吸盤の要領で胸から離れなくなってしまう器具に、鬼灯が身悶える。

もう、吸盤で吸われているだけで快感が生じるのだ。しかも、中のシリコン突起の先端が胸の突起を押し付け、ヌルヌルした感触も手伝って鬼灯に快感を与える。

「んっ……ぐうう……」

取り付けただけで快楽の苦悶の声を上げる鬼灯に笑いかけ、老人はリモコンのスイッチを押した。すると、中のシリコン棒がぐるぐると回転し、鬼灯の胸の突起を延々と擦り続ける。

「あああああああああっ！」

ぬめる舌で舐め続けられている感覚に襲われ、鬼灯が艶声を盛大に上げる。しかも棒の動きは延々と続き、突起の全方向をぐるぐると舐め回し続ける。

胸でのイキ癖がってしまった鬼灯は、すぐに絶頂を迎えてしまい、それでも続けられる愛撫に絶頂が終わらない。

「っ……っ……っ！」

ブルブルと上半身を震わせて涙を流す鬼灯の妖艶さに見とれながら、老人はかたわらの黒スーツの男に目配せした。

「それじゃあ、頼むよ……」

そう言つて屈強な黒スーツの男が鬼灯の手足の拘束をほどいたが、鬼灯の身体をうつぶせにさせ、息苦しくないように胸元に枕を当てて、鬼灯の体勢を変えた。

弛緩剤が効きすぎて、唯一自由になれる瞬間だったというのに、鬼灯はなにもできず、なによりも締め付けられている自身が疼きすぎてなにも考えられなかった。

「はあ……はあ……はあ……」

喘ぐ鬼灯を無視して、老人たちは鬼灯の鍛え上げられて見事な隆起をしている背中をほめたたえ始める。

「これはなんと美しい背中だ……！白いし、浮き上がっている筋肉も申し分ないよ！」

「真っ白ですね。実に美しい筋肉の隆起だ。実に感じやすそうで、そそるよ」



終わらない胸絶頂に鬼灯が背をのけ反らせるが、その姿すら美しかった。

胸のカップはリモコン操作で強弱が自由らしく、動きが激しくなったり、柔らかくなったりして鬼灯を構えさせない。

予測不能の動きを常に与え続け、もう快感しか考えられないように仕立て上げられていた。

しかし胸の快感ばかりに気を取られている暇などなく、自身を責めているバイブがズクズクと鬼灯自身に甘美な振動を与え続けている。

射精ができないのがこんなに辛いのかと思えるほどそれは気持ちよく、しかし先走りの淫液も出せないほどの圧迫に、鬼灯は快樂で苦しんだ。

「うあっ・・・あっ・・・あああっあああ・・・！」

（も、もうこれ以上何もするな・・・やめろ・・・）

しかし鬼灯の願いとは裏腹に、老人たちが鬼灯の背中の方こうで何やら不穏な空気を醸し出している。

「じゃあ、このエネマをとりだそうか。まあ、最後に一回ぐらいはイッところかね？」

そう言われ、エネマの底辺を掴まれると、ゴリゴリと左右にひねりながら上下運動をし始める。

「っーうぐっーうあっーああああああ！」



今でもすでに絶頂が続いている状態だが、老人の言い草ではもっと強烈な刺激が鬼灯を襲うらしい。

「とにかく、全身にイキぐせを付けないとね……。じゃあ、がんばってカプセルが溶けないように、なるべく興奮して身体を熱くしないようにするんだよ」

そう言って新しく取り出したのは、グリップの先がヘラのように曲がった透明な淫具で、ヘラの内側と突端には無数の疣が付着し、透明な器具の中には、怪しげなコードが内蔵されているのが透けて見えている。

「これで前立腺を集中的に責めるよ？これはかなりハードだからねえ……。これを使われて心が折れなかった子はいないんだ」

「加々知くんなら、最後までがんばってくれろと期待しているよ？」

「でもカプセルも挿れられているしねえ……」

くくっ、と老人たちは笑い、鬼灯の美裸体を見る。

(こ、これ以上何をするんだ・・・こいつら、いい加減にしろっ・・・！)

枕に顔を押し付けて、ふっふっ、と吐息を繰り返しながら、鬼灯は心の中で毒づいている。しかし、にゆるりとした感覚が秘孔に突き付けられ、快楽が立ち、一気に意識がさらわれてしまう。

「あああ・・・っ」

ローションをたっぷりつけた淫具がずぶずぶと洞内に侵入し、絶頂が冷めやらない鬼灯の内壁を刺激し続ける。

しかし今度の淫具は今までの物よりも短く、その代わりに太かった。そして、前立腺を容赦なくゴリゴリと擦りあげる。

「っ・・・っ・・・！」

息が詰まりそうなほどの激感を浴びせられ、鬼灯は歯を食いしばって耐える。

今度の淫具は、余計なことはせず、ただ前立腺を刺激するのみに特化したものらしく、その分身体に受ける衝撃は強絶だ。

「うっ・・・うぐっ・・・うう・・・っ」

洞内に異物が挿入されているだけで、内壁は異物を排出しようとする無意識に動く。しかしがっちり前立腺をとらえ、奥深くまで挿った淫具はその程度では吐き出されず、むしろ内壁の蠕動が淫具を脈動させ、自分で勝手に前立腺を摩擦し、呻かすにはいられない愉悦が湧き上がってくる。

「このままおとなしく挿入してもイクだろうけどね、私たちは、君のような美男子が泣き叫ぶ姿を見た  
いんだ」

「少しきついけど、動かしてあげるよ・・・」

秘孔から飛び出しているグリップを掴むと、老人は淫具を上下左右にゴリゴリと動かし始めた。淫具の疣が前立腺を容赦なく抉り、圧迫されているだけで絶頂に至る部分が、超過の刺激に痙攣する。

「あああああっ！やめ、あああっ！あっ！あああああああ！」

前後に擦られるとローションで浸された淫具が、秘孔の入口でくちゅくちゅと淫らな音を立て、中では前立腺が激しく上下に擦り立てられる。

ジンジンと響く絶悦の中、カプセルらしいコリコリとした異物の感覚も感じ、鬼灯はその存在をいやでも認識しなければならない。

(一体何を挿れられたんだ・・・も、もうこれだけでギリギリなのに・・・)

「ああっ！あっ！ああああー！ー！ー！ー！っ！」

三分と立たずに声を上げずにはいられない強烈な絶頂が鬼灯の下半身を襲い、激悦に上半身をのけ反らせる。

しかし、絶頂しても淫具が中にあるかぎり、完全に愉悦は引いて行かない。

「うっ・・・うう・・・っ」

苦悶の快樂吐息を吐きだしながら、鬼灯がぐったりとシートに沈み込むのを見ると、老人たちは鬼灯の足元でなにやら笑い合い、不穏な雰囲気ですの準備をしているらしい。

「ふふ、このデイルド、どうして透明だかわかるかい？」

「っ……あく、しゅみっ……！」

これまで散々無数の男たちに犯されてきた鬼灯には、淫具が透明である意味をすぐに察知して老人たちを蔑んだ。

「ははは、そんな口を叩くと言う事は、使われたことがあるんだね？全く、処女のように見えてとんだ淫夫だよ！」

老人たちの爆笑が鬼灯のカンに障る。しかし、怒りよりも快楽が勝り、鬼灯は何もできない。

（こいつら、絶対に阿鼻叫喚地獄へ墮とすっ……！）

鬼灯の顔に一瞬目が眩むような感覚が襲い、すぐに視界が正常に戻る。懐中電灯の光を当てられたらしく、やはりそういう魂胆か、と鬼灯は恥辱でシーツを握りしめる。

「じゃあ、見せてもらおうかな、加々知くんの中……」

「い、嫌ですっ……！」

それだけ声を絞り出したが、挿入された淫具をクチュクチュと左右に振りたくられ、頭は真っ白になる。

「あああああつ！」

「ほら、名器と言われる中はどうなっているのかな・・・？」

鬼灯に挿入された透明の淫具は、光を当てられると洞内が見える仕様になっていた。

誰にも見られるはずのない、羞恥の洞内を、このような汚らしい根性の老人たちに見られる事が、この上なく悔しい。

「おお、綺麗なピンク色だねえ・・・」

「ヒクヒクしてるよ、気持ちいいんだね」

「凄く強い力で締め付けているんだな、これは確かに名器だ」

「カプセルがまだ溶けていないようですな・・・」

へラ状の奥に先端が見える反射仕様がされているのか、前立腺に未だ残留し続けている怪しげなカプセルを指摘する。

「ほらほら、早く溶かして気持ちいいことしか考えられない、バカになってしまいなさい」

そう言うと老人は淫具のグリップを掴み、上下左右に淫具を握ねまわす。

「あはあああああつ！あああつ！」

鬼灯が声を張り上げて腰を震わせたと同時に、洞内のカプセルが溶け、内包されていた粒子が外へ流れ出した。

「浸透するまで少し時間がかかるかもね。なんせ原液だから」

笑う老人の声も、怪しげなカプセルが溶けたことへの不安で鬼灯の耳には通ってこない。

(く、薬が・・・溶け・・・?)



「……………っ！」

鬼灯は何も考えられない。胸では常に舐められる感覚があつてほぼ継続絶頂し、バイブを取り付けられている自身は、気持ちいいが絶頂できない焦燥感が凄い。それらの感覚が十倍にも百倍にもなった強烈さで、鬼灯の身を苛みに来る。

「答えたまえ、気持ちいいかな？」

言いながら淫具のグリップを左右へ小刻みに動かし、洞内へさざ波のような刺激を与える。

「うああああっ！やめ、はあ、ああっあああああああ！」

「気持ちいいかどうか聞いているんだよ？」

「うぐうううううっ！き、気持ち……………い……………」

これまで反抗的な態度を崩さなかった鬼灯から、快楽を訴える言葉が放たれて老人たちが快哉をあげる。しかし鬼灯は、体中が快楽にまみれてそれを屈辱に感じる隙も無い。

上半身は胸絶頂でジンジンと蕩けそうで、自身はずっと射精止めを食らっているのに刺激を与えられ続けて、今にも破裂しそうだ。

老人たちの鑑賞の的にされている洞内も、淫具が前立腺を強力に突き上げ、ドクドクと激悦が流れ込んでくる。

「ああっ・・・あ・・・あああああああ・・・！」

身体中のあちこちをビクビクと跳ね上がらせて、鬼灯が消え入りそうな声で喘ぎ、全身で巻き起こる絶頂と同等の快楽に流されている。

「イク、イクっ・・・！極めっ・・・あああああああっ！胸っ・・・がああああ・・・っ！」

鬼灯の状態が激しくしゃくりあげ、壮絶な胸絶頂を訴える。だが身体の痙攣は続き、鬼灯は上体をビクンビクンと激しく反応させる。

ベッドへ上体を預けると、胸のカップが密着して余計に快楽が強くなり、また絶頂してしまうという悪循環に陥ってしまう。それを懸念して鬼灯は必死に胸がベッドにつかないように身体を反らせぎみにしていたが、快楽を感じているのは胸だけではない。

※中略※

「さあ、いくらでもイッていいよ……イキ狂いたまえ……」

ようやく解放された鬼灯自身を、ラバー絨毛が生えた手袋が包み込む。

「んんんんんっ！」

それだけで腰がじゅわあ……と蕩けそうな快感が沁み込み、鬼灯は軽く射精してしまう。

「おお、すでにピュッと出たよ……でもこんなもんじゃないだろう？」

「精液増量液も打ってるんだ、たっぷり出るよ……」



「あああああつ！つ——————————————————————つ！ああつ！ううううう——————————つ！」

鬼灯の美裸体がブルブルと痙攣し、自身の先端から何度も白液が噴きあがる。それも尋常な勢いではなく、鬼灯の裸体や、ベッド周辺を汚し、一回一回の量も衰えることなく大量に噴き出されていた。これほどの勢いと量の精液をほぼ一擦りごとに吐き出し、鬼灯の下半身には鋭く研ぎ澄まされた激悦が突き刺さり続け、いつまでたっても抜け出さない。

「つ——————————————————————！」

射精の快感が凄すぎて、とうとう声も出せず、全身を硬直させてブルブルと痙攣させながら、黙ってびゆるびゆると白液を放ち続ける。

絶頂できない淫拷問が終わり、今度は絶頂がとまらない淫拷問の始まりだった。

苦悶しているかのような、鬼灯の精液に濡れた絶世のイキ顔を老人たちは鑑賞し、口々に賞賛の言葉を送る。

「気持ちいいだろう？加々知くん……。すごい勢いの射精だね。ほう、まだ出るのかね？」

「ははっ、これはすごい。バケツに溜まりそうだな！」

「加々知くんの精液なら、舐めてみてもいいですね・・・」

「うっ・・・ううーーーーーーーっ！」

二分近く感極まる射精絶頂を続けた鬼灯は、大量の白液を周囲にまき散らし、自身の身体を自分の精液にまみれさせながら、未だに白液を放ち続ける。

しかし最初の三十秒に比べれば、量は減ったかもしれない。

ラバー繊維の手袋をはめていた老人が疲労を訴え、新しい手袋の老人に切り替わる。その手袋にはさらに刺激が強いネコ舌の繊維が張り付けられ、こちらもローションを浸し、容赦なく鬼灯自身を握り込み、擦りあげる。

「あああああああっ！ああーーーーっ！」

強刺激に切り替わったことで鬼灯の反応が大きくなり、再び白液が勢いよく吐き出されるようになった。

強烈な刺激が鬼灯を襲い、火がついたように熱く、溶岩を噴き出しているかのように精液が熱く、快樂と認知するには強烈すぎる激感が鬼灯からほとぼしり続けた。

「なんだ、まだまだ出るじゃないか・・・」

「あああああつ！ああああつ！も、もう、いいつ！あつあああああ！あああーーーーーつ！あつ！あつ！あつ！あああつ！んぐううううーーーーーつ！」

噴水のように鬼灯自身の先端から白液がびゅくびゅくと吐き出され、すでに尋常な成年の排出する精液の量ではない。これだけの量を堪え、耐えていた鬼灯の苦しさを思えば、気が狂わなかったのが奇跡のように思える。

ジョリジョリと自身を摩擦され、続けられる淫刺激に、射精は続くが、鬼灯の反応が次第に薄くなってくる。

「あああつ・・・あつ・・・あああ・・・あ・・・つ・・・うう・・・つ」

二連続で立て続けに白液を放ち、鬼灯の腰がビクビクと激しく痙攣したかと思うと、鬼灯の身体はふっと力を失い、一気に脱力してベッドの上に沈み込んだ。

「おや、気を失ってしまいましたか」

「しかし凄いな、この子は。こんなになるまで耐えていたなんて・・・」

「強請る姿の可愛いこと・・・くく、本当に探し出せてラッキーだったよ」

涙を流してイキ顔のまま意識を失った鬼灯の妖艶な美貌を眺めながら、老人たちが満足そうに談笑する。

「そろそろ我々も休憩といこうじゃないか。君たち、彼の身体を綺麗にして、シーツを新しいものにしておいてくれ」

そう言って、さらに老人たちは細かい指示を下してゆく。

黒スーツたちのサングラスの向こうの表情をうかがうことはできないが、口元へ密かに笑みを浮かべる者がいる。

恐悦の絶頂を終えて、安寧の眠りに入った鬼灯を残し、老人たちはぞろぞろと部屋を退出し、後には数人の黒スーツたちが残された。

※中略※

「我慢しないで一回イッつけ。今後、自由にイケるかどうかわからないんだからな……」

そう言うと男はさらにリモコンのスイッチを触りながら、恐ろし気な宣告を告げる。

「っ………!!」

挿入されていた淫具が大きく円を描いて首振り回転をし始め、敏感な鬼灯の性感帯を容赦なくゴリゴリと摩擦し始める。

内壁を擦られるだけで叫び声をあげなければならないほどの激感だというのに、前立腺が擦れた瞬間、腰を突き上げる衝撃的な激悦が襲ってくる。

「っ、あつ、ああああつ！あつ！やめ、こんな、ああ、あああつ！ひ、卑怯………！んんっ！あつ！あつ！あつ！ああああ………！！」

洗浄された鬼灯の白い身体に再び汗の珠が流れ、あえなく肛悦絶頂を迎えてしまう。

鬼灯が絶頂すると淫具の動きはすぐに止められ、肛悦絶頂から降りる愉悦をじっくりと味わわれる。

「はあー、はあ、はあ、はあ……」

淫具の動きを止められたのは二度絶頂させられてからだだった。ようやく解放され、鬼灯は必死の吐息をつく。

「気持ちよかったか？これから責めるのはチンポだ。散々虐めておけと言われてるんだ。与えられた道具全部を使ってこれからお前を責める」

「……」

またあの射精止め拷問を味わわれるのかと思うと、鬼灯は憂鬱な気分になった。しかし、そんな白い胸の片隅が、ドクンと期待の高鳴りを示したことは完全に無視した。

「まずは注射だ。悪く思うなよ……」

鬼灯自身をたくましい手で鷲掴みにする。それだけでドクドクと快楽がこみあげ、鬼灯は自分の身の浅ましさに歯噛みする。

しかし用意された注射をやすやすと裏筋に打たれ、鬼灯は再び射精狂いの激情へ突き上げられてしまう。

「ふあああつ・・・あつ・・・ああ・・・！」

「苦しいか？でもまだまだやるぞ」

射精寸前の快楽に身体を妖艶にくねらせる鬼灯をみても黒スーツの男は動じず、新しく注射を用意して、今度はその下の陰囊に突き立ててゆく。

「あぐっ・・・！ああ、そ、それはっ・・・！」

相変わらずの無痛針だったが、熱い淫肉に流れてくる冷たい薬液で何をされたのか鬼灯は察する。

「精液増量の促進液だ。おら、もう一発打つぞ」

「くううつ・・・！やめろ・・・！」

絶頂寸前の快楽が常に続き、射精することしか考えられなくなる淫拷問を思い出し、鬼灯は必死に抵抗の言葉を叫ぶが、手の空いている黒スーツの男たちに足を押さえつけられ、抵抗することなど許されなかった。

「あああああ・・・！」

一本で十分威力を発揮する精液増量の薬を二発も打たれ、鬼灯がその絶望的な処置に悔恨の声を上げる。薬液を全て注入され、下半身をブルブルと震わせる鬼灯を知らながら、黒スーツの男はあろうことか陰囊を鷲掴みにし、薬液が速く行き渡るように激しく揉みしだき始める。

「あああ！や、やめろ！んぐうつ！あつ！あああああつ！あつ！あーつ！あーつ！」

男たちは知る由もないが、陰囊の刺激だけでも絶頂できる鬼灯には、差し迫る快楽だった。ひと揉みされるだけでズクンと思えば悦びが器官に溜まり、それが容赦なく連続して行われ、鬼灯は快楽の淫撃に下半身を震わせて耐えなければならなかった。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

散々陰囊を弄ばれて、身体に汗が浮き上がるほど感じさせられながら、鬼灯はようやく解放される。

「なんだ、タマも感じるか？イクなら、イクって言うておけよ。もつと気持よくさせてもらえるだろうか  
らな」

そう言っつて黒スーツの男が初めて口に笑みを浮かべたが、それは朗らかなものではなく、見た者をぞつと  
するたぐいの笑顔だった。

刺激されたことによつて薬の回りが早くなり、陰囊がたちまち肥大し、射精したくてたまらない衝動に駆  
られる。

「うっ・・・！ぐっ・・・！ああっ！くっ・・・！こんなものっ・・・！」

力を持ち始めていた鬼灯自身は完全に立ち上がり、薄桃から紅に充血しはじめ、先端から先走りの淫液を  
とるところとこぼし始めた。

するとスーツの男が鬼灯自身を握り込み、絶妙の力加減で掴んで、上下に激しく摩擦し始めた。

火が付いたように突然快楽を与えられ、鬼灯は戸惑いながらも快感の声を張り上げる。

「ああっ！あっ！あっ！あっ！あああっ！イク、あああっ！あっ！ああっ！」

摩擦し始めて二分と立たず、鬼灯自身の先端から白液が吐き出され、鬼灯の上半身にまで飛沫を飛び散らせる。

達精の快感ではあはあと荒い息を吐いている鬼灯を尻目に、黒スーツの男たちが近寄り、再び鬼灯自身を緩く摩擦する。

「んぐっ・・・んっ・・・ううっ！」

（潮を吹かせる気か・・・！）

恥辱に鬼灯は奥歯を噛み締めたが、与えられる快楽にあらがえない。しかし、男たちは鬼灯自身が完全に反応したところで手を止め、絶頂に登る途中で快感を放りだされてしまう。

「ほら、調教の時間だ・・・」

そう言つて黒スーツの男が細い革ベルトを鬼灯に見せつけた。

「ぐっ・・・また下種なことを・・・！」

鬼灯の侮辱の声に耳を貸さず、男たちは鬼灯自身の根元へしっかりと革ベルトを装着させ、射精できないように仕込んだ。

「この程度で済むと思うな。覚悟しろ」

冷たい声で黒スーツの男が言い放つと、小さなケースから細いカプセルを取り出した。

「・・・また中に挿れるつもりですか・・・！」

ギリリと男たちを睨む鬼灯だったが、男たちは当然動じない。

鬼灯の腰の下に枕を入れ、完全に反応しきつて根元を締め付けられたSMペニスを突き出す格好にさせられ、屈辱の体勢を取らされる。

「挿入するとも。だが、ここにな・・・」

そう言うと、男は鬼灯自身を掴み、その先走りすら止められた極小の穴、鈴口へカプセルの先端を押し付ける。

「んんんっ！ああ！な、なにを！そんなの無理です！やめなさい！」

尋常ではない行為に及ばれ、鬼灯は下半身の強烈な疼きも忘れて必死に制止を乞う。

しかし男は力任せに鈴口へカプセルを押し込み、細いカプセルは上から押しあてられるまま、ツプツプと侵入してゆく。

「うあっ！あああっ！あああああああ……っ！」

射精するのとは違った種類の悦が鬼灯を襲い、尿道を押し広げながら押し込まれる異物の感覚に、腰がビクビクと痙攣してしまう。

その痙攣すら他の黒スーツに抑え込まれ、鬼灯にカプセルを押し込んだ男は、もう一つ取り出して鈴口へと無理矢理挿入しようとした。

「はああああああつ！も、もう無理！やめてください！ああつ！あつ！ああああああつ！く、苦しい  
っ……！」

正確には苦しさととは違った圧迫の快楽が鬼灯を襲っていたが、黒スーツの男たちには関係ない。  
一つ目のカプセルがさらに奥へ押し込まれ、二つ目のカプセルが、鈴口から先端だけをのぞかせて、あと  
は全て埋没させられた。

「ううっ……うっ……うう……うう……」

「悪いが、これも指示どおりでね。たぶん狂うほどキツいだろうが、まあ運が悪かったと思つて耐えるん  
だな。せいぜい壊れるなよ……惜しいから」

そう言い置いて、黒スーツの男はカプセルを二つも飲み込まされたばかりの鬼灯自身を広い掌で握り込み、  
激しく上下に摩擦し始める。

「あぐっ！やめ、やめ、あああああつ！苦しつ……！あああああ！あああああ！」

腰を何度も突き出して激しい快楽の反応を示し、鬼灯が艶声をあげる。当然自身からは先走りの淫液すら出ず、刺激されるがままに自身が熱くなるだけだった。

「っ——————！！」

突然鬼灯自身の根元に尋常ではない衝撃が巻き起こり、連動して鬼灯自身全体に炎が巻き起こったかのような激烈な感覚が生じた。

「あっ……かはっ……！！」

尿道に挿入されたカプセルが二つ同時に溶け、鬼灯自身に影響しはじめたのだ。

「ふあっ！あっ！あああああっ！うっ！うあっ！これはだめだ、キツイ、あああっあああああ  
あ！イキたい、たまらない！は、早く！あああああ！」

これ以上はないほど取り乱して絶頂を乞い、腰を振りたくる鬼灯を笑いながら見つめ、黒スーツの男たちが迫る。

「どうだ堪らないか？拷問用に使う神経薬らしいが、それを改造したものらしい。まったく、あいつらはエゲつないものを次々と開発するもんだ」

淡々とした声で告げる男になど関わっていられず、鬼灯はただ達精の欲求だけに突き動かされ、身体をあばれさせていた。

「あぐっ！あぐっ！あああああつっ！はあっ………！ああ、い、イキたいっ………！」

ブルブルと震える鬼灯の極上美肌を眺めながら、虫の羽音を立てる器具を黒スーツの一人が用意する。

「あああああつっ！い、今はそれはダメえ！あああつっ！や、やめてください………！」

しかし男は鬼灯の言葉など聞かず、途方もない射精止めの焦燥に駆られている鬼灯自身に容赦なく振動部分を当てる。

「あああああああああああああ！あああつっ！ぐあつ………！あああつっ！イク、イクイク！あああああああ！く、苦しいっ！やめて、あああ！ああ………っ！」



「あうっ、あうっ・・・あううう・・・」

快楽の旋風が終わっても、また触れて欲しい激しい衝動にかられ、鬼灯は限界の涙を流す。自身は心臓になったかのように早鐘のごとくドクドクと脈動し、刺激されると辛いのに、刺激がないと余計に辛いという矛盾した状況に追い詰められていた。

黒スーツの男たちは次の行動にうつり、ベッドに縛り付けていた鬼灯の拘束を外し始めた。

首とつながった革ベルトや、両足を広げている鉄パイプは取り払われなかったが、鬼灯が本気を出せば起き上がって逃げられそうなほどには拘束を緩められる。

しかし、今の鬼灯は全ての感覚が射精欲求に向かい、自身へ想像を絶する焦燥感を持ち続け、脱出へ行動を移すなどと言う概念は浮かばなかった。

「ほら、これで自分でできるだろ・・・」

拘束から解放されて、鬼灯はすぐさま手を伸ばして自身に触れようとしたが、首からつながった革ベルトが下半身までの行く手を遮り、どう手を伸ばしても自身にまで届かない。

「うつつ……!」

両足も鉄パイプを間に嵌められて閉じることができず、鬼灯はだた焦れるのみだ。しかしじっとしていられるほどの激情ではなく、鬼灯は身体を遮り無二暴れさせ、なんとか自身へ触れようと尽力する。

「ふぐつ……!うつつ……!ああああ、だめっ……!」

俯せに転がった途端、ベッドから落下し、鬼灯は毛足の長い絨毯の上にひれ伏してしまふ。

しかし落下した痛みや衝撃よりも、自身の疼きを沈めたい一心で、鬼灯は自分の恰好など鑑みる余裕はなかった。

無様に絨毯の上へうつぶせに伸びる鬼灯だったが、下半身へ確かに刺激を感じた。

毛足の長い絨毯が猛った自身を刺激し、山火事の炎をコップの水で鎮火するに等しいわずかな快感だったが、鬼灯はそれに縋ることにした。

「くつ……ううう……っ!」

両手を地面につけ、腕立ての姿勢になると、足の爪先をたてて自身だけが絨毯に擦れる体勢になる。

そのまま下から上へ身体をスライドさせると、自身が絨毯へ強烈に摩擦され、涎が出そうなゾクゾクとした強烈な快感がこみあげ、鬼灯は何も考えられなくなってしまった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

一心不乱に腰を動かし、絨毯に自身を擦りつけて愉悦を貪る鬼灯の姿を見て、黒スーツ男たちからもさすがに笑いが起こった。

「見ろよ、コイツ床オナしてるぜ？」

「腰が必死に上下へ動いて、たまらないようだな」

「無様だな……」

しかし何と言われようと、鬼灯は今の行為を止めると言う行為は念頭になかった。触れられたくて堪らない箇所、これほど強烈な悦が感じられる自慰を発見し、それに耽らないはずがない。

上に向かって擦りつければ鈴口を強烈に刺激して先端表面を絨毯に撫でられ、身体の力が抜けそうな愉悦が腰を走破する。

そのまま下へ向かって擦りつければ、裏筋がゾリゾリと擦られ、先端も同様に摩擦されて気が遠くなるほどの快感が巻き起こる。

(あ・・・たま・・・白く・・・)

いくら刺激を受けても絶頂はできないが、刺激がなければ狂いそうになってしまう今の鬼灯には、罵倒されようと蔑まれようと、床を使った自慰を止めることができなかつた。

「はあ、はあ、はあ、あっああっ、あああ・・・あっ・・・ああ・・・っ！」

陶酔した声で、体中を汗まみれにしながら床を使った自慰に耽る鬼灯だったが、その裸体は美しく、妖艶な淫気をむせ返るほど薫らせている。

同時に動く桃尻は疊惑的で、中芯に刺さったままの淫具が余計に淫らだった。

「もっと気持よくしてやろう」

笑いを含んだ声で黒スーツの男が言うと、リモコンのスイッチを押され、洞内に挿入されたままの淫具が激しい首振り回転をし始める。

※中略※

大きい波の胸絶頂が押し寄せ、壮絶な快感に鬼灯が嬌声を上げる。まるで胸が熱で蕩けそうな絶対的な愉悦に、鬼灯は一瞬意識を遠ざけたが、下半身の刺激ですぐに意識は引き戻された。

「つつ！あああつ！あああああ！」

鬼灯の洞内に挿れっぱなしになっていた淫具が再び稼働し始め、首振り回転をし、鋭敏な洞内を容赦なく抉り始める。

「ふふふ・・・いいぞ加々知くん・・・素晴らしい反応だ、たまらないよ・・・」

「我慢汁が止まらないよ？もうイクかね？」

妖艶に身悶えする鬼灯を、十個を超える老人たちの目がじつくりと見据えている。カメラを合わせれば目は三つに増える。さらに、老人たちが好き放題に撮りまくっているスマホを合わせれば、二十はくだらなくなってくる。

「ほら、イケイケ・・・」

鬼灯自身を舐め続けている老人が、嬉々として鬼灯に射精を促し、先端から口腔内に咥え込んで尿道口を舌先で素早く舐めまくる。

「ああああつ！あつ！あ、あああつ！つーーーーー！」

急激に射精の感覚がせり上がり、同時にしめつけた洞内から、肛悦の快感が襲い、鬼灯は前と後ろでほぼ同時に絶頂を極めた。

「んぐうううーーーーー！」

強絶な快楽に声帯すら押しつぶされ、鬼灯は全身を震わせて激烈な絶頂を迎える。

自身の爽快感を伴う射精快楽と、ズンと重く垂れてくる蕩けそうな肛悦快楽の両方を極めて、鬼灯は再び意識を落としてしまった。

がくりとベッドに身体を投げ出した鬼灯の様子を見て、老人たちがさざ波のように笑う。

「気絶してしまいましたねえ……」

「あの気の強い加々知くんが気を失うほどですから、相当な快楽なんでしょうね。全く、うらやましいですよ」

「あらら、チンポが萎えてしまいましたよ……こりや完全に気絶してしまいましたな」

「イキ顔のまま気絶ですか……官能的ですね」

未だに鬼灯の中で首振り運動をしている淫具の動きを止め、老人の一人がその根元を掴んで一気に引き抜くと、鬼灯の白い身体が小さく震え、目覚ましの刺激になったらしく、長い睫毛を震わせながら黒瞳をゆっくりと開いた。

「あっ……はあ……ああ……」

一旦意識が途切れたというのに、身体には快楽が残留しているらしく、鬼灯は身体を蠱惑的にくねらせてため息を吐く。

「全く、君には少し失望したね……この程度で気を失ってしまうなんて、だらしないよ」

常人ならば発狂しそうな激快楽を味わわされ、鬼灯の快楽の苦しみも知らず、老人がぬけぬけと言う。

「それに、イクときはイケと、あれほど言っているのに全く言う事を利かない」

「私たちに褒められて、いい気になっているんじゃないかね？」

未だに身体を疼かせ続ける絶頂の余韻が、鬼灯の意識を奪い、老人たちの勝手な言葉が耳に入ってきて来ても言い返すことができない。

(何か……非難されているようですね……どうでもいいですが……)

ぼんやりとした意識の中、鬼灯はふたたびジリジリと身体の芯が熱くなってくるのを感じていた。ずっと蹴られ続けていた胸が疼き、下半身が勝手に反応してしまう。

「ふふ、薬の効果はすごいね。一旦萎えたというのに、刺激も与えないでまた勃起始めている」

一人の老人に自身を鷲掴みにされ、走る快感に鬼灯が官能の呻き声をあげる。

媚薬入りのカプセルを二錠も尿道に挿入され、苛烈な発情状態にある鬼灯自身は、気を緩めれば無意識に快楽を乞うてしまいそうになるほど激しく疼き続ける。

風が吹いただけで全身が総毛だつほど感じやすくなっているというのに、老人たちはそれを知ってか知らずか、鬼灯に遠慮のない責めを続けてくる。

「しかし、さっきに比べれば随分大人しくなっていましたね」

鬼灯は十分感じているが、体力を使う激感に堪えるため、反応が最小限に抑えられているだけだ。今も、老人に自身をゆるゆると上下に擦られているだけで、涎が出そうなほどの愉悦が走っている。

(んぐうう・・・こんなに感じているのに・・・もうこれ以上は・・・)

「もう薬は消化してしまいましたか？なにせ即効性に長けたブツですからね。効果が切れるのも早い」

「そうでしょうか？博士の説明では三十分は効果が続くはずだと言う事ですが・・・」

「どっちにしろ、反応が薄いんじゃないや面白くない。私はこの子が泣き叫ぶ姿をぜひ見たい！」

「そうですね、罰の意味も込めて、また薬を使いましょうか」

「……っ！」

薬、と聞いて鬼灯の身体がこわばる。

これ以上身体の性感を底上げされるなど、全く想像がつかない。感じやすいが、強烈な快楽には慣れていない。鬼灯だが、人間の身体で受ける調教は思ったよりも強烈で、それは確実に危機感へと変わっていた。

「んっ……くう……」

鬼灯自身を完勃させると、老人の手が離れたが、その途端に触れてほしくてたまらない衝動が鬼灯を苛む。自身の敏感さは、恥辱の床オナの時から変わらず、多少焦燥感を逸らせるのに慣れただけで、ズキズキと強烈に疼き続けている。

「では、お仕置きをしましょう。君、あれを持ってきてくれる？」

黒スーツに命じて老人は何かを用意させるが、鬼灯の位置からは何をされているのかわからない。

すると急に自身を乱暴に驚掴みにされ、突発的に生じた快楽に先走りの淫液をこぼしてしまふ。

「うっ……!!」

快楽に呻き声をあげ、顔を歪ませる鬼灯の美貌を満足そうに見つめ、老人たちは次の責めに移行しようとしていた。

「エッチなチンポだねえ……こんなに綺麗な色をしているのに、射精したくてたまらないんだろ？尿道がパクパク動いているよ……」

(くっ……いらぬことを……!)

薬に狂わされた自分の姿など聞きたくない。鬼灯は横顔を枕に沈ませ、シーツを掴み、羞恥に耐える。

「さあ、お仕置きだ。これから容赦なく責めるから、覚悟するんだよ……せいぜい、廃人にならないでね」

すると、鬼灯自身の突端、小さな鈴口に何かを押し込もうと圧力がかった。

(ま、まさか・・・！)

「尿道に使ったカプセルだよ・・・一個でも十分効力があるんだけど、君にはもっとキツイお仕置きが必要なようだからかね・・・」

「あああつ！そ、それは嫌です！やめてください！あつ！あつ！」

窮屈な尿道内に、どんどん細いカプセルが挿入されてゆく。吐き出すだけの器官へ逆に異物を挿れられる感覚は、感じてはいけない禁断の快楽が入り混じり、多少の圧迫された苦しさも同時に關して、鬼灯は体中から汗を垂らす。

「んぐうううーっ！」

一粒のカプセルが完全に鬼灯自身の鈴口に挿入され、さらにぐいぐいと押されて奥へ奥へと侵入させる。

(こ、これが溶けたらだめだつ・・・！なんとか吐き出さないと・・・！)

焦る鬼灯だったが、老人は鬼灯自身に添えた手を離さず、黒スーツからまた小さな会話を交わし、終わった途端、再び鈴口に異物を感じた。

「やっ・・・！やめ！もう駄目です！苦しいっ・・・！」

「確かに今まで尿道にこのカプセルを二つ使うのはめったにないよ。だけど加々知くんなら耐えられるだろう？」

黒スーツに責められている時、すでに二つカプセルを飲み込まされたというのに、老人たちは一粒しか使っていないと思っている。

それを必死に訴えようとするが、尿道に異物が挿入される疼悦に圧倒され、言葉を発する理性が飛んでしまう。

「うああっ！あっ！やめええ！も、無理っ・・・！」

すでに挿入されていた一粒目が二粒目に押されてさらに奥へ進み、尿道内をどんどん進んでゆく



最初に挿入された一粒目がさらに奥へと突き進み、精巣にまで達しそうになって、決してまともでは触れられない部分を突かれる激感に、花火のように激烈快感が迸る。

「うあつ！うあああつ！ああつ！やめ、抜いて、抜いてー！」

汗の珠を散らしながら頭を左右に振りたくって拒絶する鬼灯の姿を見て、老人たちがますます興奮の様子で鬼灯の美貌を眺める。

「だめだよ・・・君が悪いんだからね・・・さあ、カプセルが溶けるまで玩具で遊ぼうね」

傍らの黒スーツに手渡しされ、老人は黒い半透明の小さなカップを手を取った。カップの奥にはローターが埋め込まれていて、それが禍々しさを異様に放っている。

(ま、まさか・・・)

鬼灯の嫌な予感はずっと当たる。予想通り老人はカプセルを飲み込んでパンパンになった鬼灯自身の先端に、そのカップをかぶせた。

「さあ、カプセルが溶けるまで運動だ・・・」

リモコンのスイッチを押されると、カップ底のローターが激しく振動をはじめ、尿道へその振動を直撃させる。

「ああああああああつ！あああああああーーーーー！」

魂が削がれるほどの超絶激感が鬼灯を襲い、拘束をギリギリときしませて力の限り鬼灯は白い裸体を暴れさせる。

尿道内に無理やり異物をめいっばい挿入され、さらにそこへ振動を通されるなど、これ以上苛烈な責めなどありえないほどだった。

ヴヴヴヴと無表情に振動し続けるローターには鬼灯の快楽の拷問など知る由もなく、つぎつぎと振動を送り続ける。

「ああつ！あつ！く、うううううう・・・！や、やめ、やめて・・・！た、たまらない・・・！ぐあつ！あぐつ・・・！ああああああああ！」

身体中を激しく乱舞させる鬼灯を生唾を飲んで見守る老人たちが、ほくそ笑みながら悠々と言葉を投げかける。

「これこれ、はしたないよ加々知くん。最初の冷静さはどうしたのかね？あの私たちを鋭くにらみつけた目が、涙にぬれているよ？」

「すごい暴れようだな。いくら慣れた加々知くんでも、ここまでのチンポ責めはされたことはないだろう？カプセルが溶けてからが、さらに楽しみだ……」

ローターの振動で中のカプセルも同時に振動を伝え、尿道の奥にまで被虐快感を容赦なく伝えてくる。下半身の奥にまで響く振動責めに、鬼灯は理性を失うギリギリで耐え、恥辱の涙を流し続けた。

「ううううううっ！ああっ！あーっ！あーっ！あーっ！あーっ！」

もう絶頂に匹敵する快感がずっと続いている感覚だった。

一瞬でも意識が沈むほどの射精絶頂の快楽を延々と味わわれ、鬼灯の意識がどんどん霞んでくる。鬼灯自身は真っ赤に染まり、無理矢理与えられた熱で、とうとう中のカプセルの外壁が溶け始めた。

「っ……っ……！」

じゅわあ……と我慢できないほどではないが、暴れださずにはいられない熱が鬼灯自身の奥深くを襲い、あまりの激感に声も出せない。すると、二粒目のカプセルも連続して弾け、再び耐えきれないほどの熱。連動して三つめも溶解し、鬼灯自身は完全に強力極まりない媚薬に支配された。

ハンマーで殴打されているに等しい絶頂欲求の塊が一気に押し寄せ、たちまち鈴口から精液を放ってしま  
う。

その勢いで、嵌められていたローターつきカップが押し上げられ、射精と共に噴き上げられた。

「あああああああああああああ！」

鬼灯の壮絶な艶声が室内に反響し、その乱れように老人たちは次々とシャッターを切る。

一粒どころか、すでに二粒使われ、それに気づかれることなく三粒、四粒、五粒とまで挿入され、限界を  
超える性感を引き上げられた鬼灯自身は、これ以上は無理だと思われた性感をさらに数倍に持ち上げられ、  
およそ普通の人間には耐えられない激悦を味わわれる。

「んぐっ！ううっ！あああああ！」

自身を刺激するローターがなくなっても、自身の疼きは脳神経を削るほどの焦燥感と性的刺激への期待でドクドクと力強く脈打つ。

「ふあああああ・・・ああ・・・あああああっ！」

鬼灯の裸体がビクビクと激しく痙攣し、なんの刺激も受けていないのに勢いよく先端から白液が吐き出された。

しかもそれは断続的で、とまる気配がない。

「あああああっ！あっ！あっ！ああああっ！んぐううっ！っ・・・！！」

鬼灯の激しい悶えようと、自身からの止まらない射精を眺め、老人たちが驚嘆しながら笑い声を上げた。

「ははっ、すごい効果だ・・・さすがに四粒は辛かったね？」

「一粒で三十回射精するに等しい快感だと聞いているが・・・ふふ、百二十回か・・・」

「逆に言えば、それだけ射精してしまうと効果がなくなってしまうのでは？」

「いえ、これは三十分は効くと聞いています。三十分の間、イキ天国を味わえますよ」

「ふふ・・・しかし、加々知くん天国を見せるためにこの薬を使ったわけじゃないんだ。ほら、いい加減に止めなさい・・・」

暴れる鬼灯の身体を黒スーツが押さえつけ、老人が滾る鬼灯自身の根元に例の革ベルトを巻き付ける。

「はうううううっ・・・！あっあああああ・・・！」

射精を強制的に止められ、吐き出した欲求に鬼灯が艶声を上げながら身体をのたうち回らせる。白い極上の裸体が汗の珠を飛ばして舞う様は、それだけで十分美しく、官能的だった。

「射精を止められて、苦しいかね？加々知くん」

「んああああっ！ああっ！うう、く、苦しい、ああああああっ！出させてっ・・・！イカせてっ・・・！」

身体をブルブルと震わせ、鬼灯が潤んだ瞳で老人たちに絶頂を乞う。その被虐的な表情と乱舞する素肌の美しさに、老人たちも生唾を飲み下す。

「可愛いおねだりだ・・・でもね、これで簡単にあげちゃ、お仕置きにならないだろ？」

「はあああああつ！そんなつ！あつ！あつ！あああつ！」

ビクンビクンと鬼灯の腰がしゃくりあげ、普段の鬼灯からは考えられないほどの媚態を繰り返す。

老人たちはその姿に笑顔を浮かべながら、三方からピンクの電マを握りしめる。

「あああああつ！そ、それは嫌だつ！やめて、やめつ・・・くださ・・・いつ・・・！」

しかし老人たちは容赦なく虫の羽音をたてる騒々しい機械の震える先端を、縛られた鬼灯自身に密着させた。

「んんっ！あつ！あああああああつ！こ、これ、だめええええええつ！」



※続きは製品版でお楽しみください